白糠のアイヌ語地名

第９回

○庶路（ショロ）川

庶路川は本町で二番目に大きな川で、阿寒富士のふもとの源流から、66・8キロメートルを流れ太平洋に注いでいます。

「ショロ」は「ソ（滝）・オロ（向かっている）・ル（道）」という意味のアイヌ語地名で、その名のとおり、河口から約30キロメートル上流には「大滝」と呼ばれる滝があります。

庶路の大滝

「大滝」は、かつて庶路川で木材の流送が行われていたとき、まわりの岩を崩して滝つぼを浅くしたことで、現在は5メートルほどの高さですが、江戸時代の後期、松浦武四郎が訪れた滝は、「此瀧幅二丈（約6メートル）、高五六丈（約15～18メートル）も有、水勢筆に盡し難し」（『東蝦夷日誌』）と言う、まさに大滝でした。

また「ショロ」は、むかし「ショロロ」「ソロロ」と呼ばれていたことから、永田方正が『北海道蝦夷語地名解』で「ショ（瀑）・リ（高き）・オロ（処）」というアイヌ語をもとに「瀑布高き処」と解いたことからも、大滝は庶路川を言い表すうえで最も特徴的なものだったことがわかります。

〔永田方正／アイヌ民族教育とアイヌ語研究に尽くした明治時代の教育者。『北海道蝦夷語地名解』（1891年刊行）は、北海道庁の命を受けて従事したアイヌ語地名調査をまとめたもので、『永田地名解』とも呼ばれています〕

◆庶路川上流の地獄穴（庶路川にまつわるアイヌ伝説その①）

古くから、庶路川の上流から阿寒に抜ける穴があると伝えられ、これはあの世に通じているオマンルパロ（あの世へ行く道の入口）ではないかと言われている。

むかし、二匹の犬が熊を追ったところ、熊はこの穴へ逃げ込んだので、二匹の犬も続いて中に入って行った。一匹は熊を追って阿寒のふもとへ抜けることができたが、もう一匹はついに出てこなかった。

それで、その穴は中で二つに分かれていて、一方はあの世に通じているのではないかと言われている。

〔日下ユキ女伝／市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用〕

◆義経と弁慶の力石（庶路川にまつわるアイヌ伝説その②）

庶路川の上流に滝がある。その滝の上にペンケイワ（上の岩）、滝の下にパンケイワ（下の岩）というのがある。

むかし、義経が弁慶を連れて狩りにやってきて休んだとき、常に力自慢をしている弁慶と力くらべをした。義経は、弁慶が持ち上げられなかった岩を軽々と持ち上げ、滝の上に投げ上げたが、弁慶はそれより小さい岩を落としてしまった。

義経が滝の上に投げ上げたのがペンケイワで、弁慶が落としたのがパンケイワである。

〔山本甚吉談／市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用〕

明治通りから見る庶路川